

氏名	ごとうまさひで 後藤正英
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第304号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科思想文化学専攻
学位論文題目	近代理性宗教論の研究 ——特にユダヤ教の視点から捉え直した理性宗教の歴史性——

論文調査委員 (主査) 教授 氣多雅子 助教授 杉村靖彦 助教授 福谷 茂

論文内容の要旨

本研究で試みられているのは、これまで宗教哲学の研究対象としてはほとんど取り上げられてこなかったメンデルスゾーン(1729-1786)の理性宗教論を解明するとともに、近代の理性宗教という宗教思想に一つの統一した像を与え、思想家によって多様な展開を示した理性宗教論の一つの見取り図を描くということである。「理性宗教(Vernunftreligion)」は、近代のヨーロッパにおいて、宗教の基礎を特定の宗教の超自然的な啓示ではなくて、人間の普遍的な自然的能力(理性ないし人間本性)の側に求めた結果として登場してきた宗教思想であり、「理神論(Deism)」や「自然的宗教(Natural Religion, die natürliche Religion)」といったさまざまな周辺概念との連関のなかで展開されてきた。

メンデルスゾーン思想の研究は、キリスト教とユダヤ教という宗教上の立場の違いに応じて理性宗教の理解にどのような違いが生じたか、ということを探き彫りにする。理性宗教は、万人にとって同一であるべき理性の普遍性の立場に依拠しながらも、そのもとでそれぞれの思想家が到達した宗教的真理は決して様なものではあり得ない。理性宗教が無色透明の抽象的な宗教論ではなく、具体的な歴史的宗教との密接な関係のもとで発展してきた宗教論であるということが本論文を貫く論旨であり、それを論者は「理性宗教の歴史性」と呼ぶ。

以上の問題を論究する本研究は、三部から構成される。

第一部は「近代理性宗教論の展開」と題して、ヒュームからカントへの展開のなかで、理性宗教論が理性批判の視点を内在化させた宗教論へと変容していく過程を追跡する。

第一章では、一七世紀から一八世紀末にかけて理性宗教がどのような思想的ないし宗教的潮流のなかで展開したのかを、自然的宗教論という、より包括的な宗教理解の概念枠を用いながら明らかにする。その際に論者は、理性宗教論の展開を、独断的な性格をもっていた初期の理性宗教論(理神論)が、ヒュームの懐疑主義によっていったん批判された後に、再びカントの理性宗教論によって再構成される過程として理解する。この場合、初期の独断的な理性宗教論を批判する重要な指標となっていたのが「人間本性(die menschliche Natur)」という概念であった。

ヒュームが理神論を批判する際に問題とした論点の一つに、擬人論(人格神)の問題がある。第二章では、擬人論の問題に関して、カントがヒュームの理神論批判から何を受け継ぎ、何を受け継がなかったか、という点が解明される。当時、擬人論をめぐる問われていたのは、神理解において自然的存在者との「類比」を認めるのかどうか、という問題であった。超自然的な対象が、そのままの形では認識できず、自然的存在者とのある種の類比のもとで感性化されねばならないことを、カントもヒュームも一致して認めている。ヒュームの理神論批判は、理神論自体が自然主義的類比という制約から逃れていないことを示したわけだが、しかし、このような批判は、理神論だけではなくて、あらゆる有神論が自然主義化され、最終的には無神論に到達しかねない帰結をもつものであった。それ故、カントは、ヒュームに抗して道徳的有神論を守るために、感性化に、客体規定における直接的な感性化と類比における間接的かつ象徴的な感性化という二つの場合を区別して、神について後者の必要性を認めた。

第二部は「モーゼス・メンデルスゾーンの理性宗教論」と題され、理性宗教としてのユダヤ教というメンデルスゾーンの思想が考察される。ここでは、メンデルスゾーンの理性宗教論は如何なる意味でユダヤ的であったのかを多面的に明らかにしていくなかで、「理性宗教の歴史性」という問題に光を当てる試みがなされる。

第一章では、メンデルスゾーンが、ハスカラと呼ばれるユダヤ人の啓蒙運動を通して、ユダヤ教に特有の立場と普遍的理性の立場とをどのように総合していったのかを明らかにする。メンデルスゾーンは、一方で、歴史的なユダヤ教の伝統に忠実でありつつ、他方で、ユダヤ教を普遍的理性との完全な一致にもたらそうとしたが、その生涯において、この二つの立場の間隙を突こうとする批判に何度も出会うことになった。『イエルーザレム』でのメンデルスゾーンはユダヤ教の中に、(1) 普遍的な精神内容と、(2) 命令や行動規則や慣習の集合体、という二つの視点を読み込もうとした。つまり、前者については、誰もが理性によって直接的に把握できるものとして、そして後者については、特殊な状況のもとで与えられた（啓示された）ものとして、理解しようとしたのである。もちろん、このような区別は、キリスト教社会の政教分離の原則に見合った形態へと、ユダヤ教を読み替えていこうとするなかで必要になったものであった。

しかし、このような仕方でもユダヤ教の理解を二重化した場合には、ある種の皮肉な事態が生じることになった。つまり、ユダヤ教の中に読み取ることでできる精神的な内容は、誰もが理性に訴えるだけで理解することのできる普遍性をもったものではあるが、そうであるからこそ、その内容は特にユダヤ教のみに固有なものとは言えない、という批判が登場することになったのである。また、それと並行して、結局のところユダヤ教とは普遍的な宗教性の体现者であるというよりは、単なる制度や儀礼に過ぎないのだ、という批判も行われることになった。論者はこのように論じて、さらにこの皮肉な事態が『イエルーザレム』に対するカントの評価からも知られることを明らかにする。

加えて、メンデルスゾーンが「ユダヤ教は単なる律法（儀礼法）に過ぎない」というキリスト教社会の側からの誤解に対して試みた再批判について論じ、ユダヤ教においては儀礼は我々に永遠真理に対する反省と思考を促す契機として存在するというその論旨を考察する。『イエルーザレム』での言葉に対する洞察のなかには、そうしたメンデルスゾーンの独自の律法（儀礼）理解が展開されている。

第三部は「理性宗教の観点から見た歴史的宗教」と題され、理性宗教の観点から見た歴史的宗教理解の問題を、ユダヤ教を中心にして考察する。

まず第一章では、カントは歴史的宗教に対してどのような態度をもっていたのかを検討し、徹底して道徳的関心に基づいてのみ聖書を理解していこうとするカントの聖書解釈の立場を明らかにする。カントは、自らの理性宗教の理念に照らした場合、ユダヤ教の律法がもつ特殊性は普遍的な理性宗教の理念に抵触するのではないかと、という疑念をもっていた。メンデルスゾーンは、律法は永遠真理に関わるものではなく人間の行為に関わるものであるという理解を、スピノザの『神学政治論』から学んだ。その上で、ユダヤ教においては教義が啓示されたのではなく、律法が啓示されたのであるという主張を行なった。スピノザは理性と啓示を分離することで律法を全面的に捨て去ってしまったが、メンデルスゾーンは理性と啓示を分離しながらも、律法を特殊化することで、律法が生き延びる道を探ろうとした。

続いて、より具体的にユダヤ教の問題に論及するために、まず第二章ではユダヤ教における基本的な律法理解について概観する。第三章ではカントのユダヤ教理解を題材にしながら、ユダヤ教の側の視点に立って、そもそも律法主義の宗教としてのユダヤ教という理解がどの程度妥当性のある理解なのか、という点について宗教史的な観点から検討する。その際、アブラハム・ユシュア・ヘッセルの議論に注目する。ヘッセルはハラハーと呼ばれるユダヤ教の法的側面のみを偏重するユダヤ教理解の問題点を指摘し、ハラハーはアガターと呼ばれるもう一つの側面と一体になってこそ、ユダヤ教徒の精神生活の全体を覆うことができることを主張した。

第四章では、第三章で明らかになったユダヤ教に内在的な律法理解を前提にしつつ、ユダヤ教は他律的宗教であるというカントの理解や、カントのアブラハム理解について、ユダヤ教の立場から一定の反論を加える。そして、理性宗教を批判したシュライエルマッハーにおいても、理性宗教が歴史的宗教を理解しようとしたときに抱えていたのと同じ問題が存在していたことを指摘する。理性宗教は、理性によって歴史的諸宗教を理解していこうとする場合、規範的観点に立つがゆえに、その結果として、特定の宗教を理想化してしまう帰結を避けられないところがあったというのが、論者の考えである。シュライエルマッハーの『宗教論』の中にも、一方で、普遍的宗教性の立場に立ちながらも、他方で、理想化されたキリスト教

によって諸宗教を理解していこうとする姿勢が指摘される。

第五章では、最晩年のメンデルスゾーンの理性宗教理解について考察がなされる。『朝の時間』では、メンデルスゾーンは理性をコモン・センスと思弁の間の調停役と見なしている。その際、調停役としての役割を単独で任じきるには理性は弱々しい存在なので、コモン・センスが理性をガイドする必要性が強調された。さらに、スピノザ論争の只中で形成されたメンデルスゾーンの最晩年の理性宗教理解が、彼のユダヤ教理解と具体的にどのような関係をもっていたかということについて、考察を加える。『レッシングの友人たちへ』では、メンデルスゾーンは、ヤコービが自らの信仰哲学をキリスト教に絡ませて論じてくるのに対抗して、ユダヤ教が理性宗教の構造をもっていることを主張している。ヤコービとメンデルスゾーンの間の決定的な違いは、前者が理性のみによって永遠真理を確信することができると思えるのに対して、他方は信仰によってのみ確信を得ることができると思える点にあると見なすことができる。

以上の考察によって、一八世紀の理性宗教の理念が、それを受け取る側の宗教の違いに応じて異なる意味をもっていたという事態が明らかになった。理性宗教は、奇蹟、イエス・キリストの神性、贖罪といった観念を否定するものであった。それ故に、グッドマンの指摘にもあるように、理性宗教の理念はキリスト教よりもユダヤ教に近い存在として立ち現れてくることになったのであるが、他方で、ユダヤ教という民族の宗教がもつ特殊性が理性宗教の普遍性に抵触するという疑義が提出された。理性宗教の理念は、必ずしもユダヤ教徒にとってプラスの側面だけをもっていたわけではなかった。ユダヤ教の特殊性は理性宗教の普遍性と整合しないという批判を強力に推し進めたのがスピノザであり、理性宗教の理念とユダヤ教の特殊性の双方を維持し続けようと努力したのがメンデルスゾーンであった。後半生のメンデルスゾーンは理性宗教の理念がユダヤ教徒にとってマイナスの側面があることを意識した上で、思索を進めざるを得ない状態に置かれていたように思われる。

さまざまな局面で二つの世界に生きたメンデルスゾーンにとって、理性宗教という宗教理解は、絶えず具体的な歴史的宗教とのせめぎ合いのなかにあった。メンデルスゾーンはその生涯の過程で、次第に歴史性の立場へと近づいていったわけだが、だからといって、彼は最後まで理性宗教のヴィジョンを捨てることはなかったと解することができる。メンデルスゾーンにおいては、ユダヤ教徒の場所は理性のなかにあるのか、それとも歴史のなかにあるのか、という根源的な問いが、いわば未解決のまま提示されている。しかし、この未解決の問いに留まり続けることが、メンデルスゾーンの回答でもあったと論者は考える。

なお最後に、「メンデルスゾーンの次世代のユダヤ人たちの宗教観」と題する補論が付加される。ここでは、メンデルスゾーン以後の同化ユダヤ人たちの宗教に対する立場を、メンデルスゾーンの弟子や子供たちの人生をたどるなかで検討した。普遍的な啓蒙の理念に則りながらも、ユダヤ教徒としてのアイデンティティを守ろうとしたメンデルスゾーンにとって、西ヨーロッパ社会の文化を受容することがユダヤ教の放棄を帰結するなどということはまったく予想外のことであった。しかし、メンデルスゾーンの後の世代の同化ユダヤ人たちは、メンデルスゾーンの理想を裏切る形で、或る者は宗教自体に関心を失い、また或る者はユダヤ教からキリスト教に改宗していった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、二つの大きな主題をもっている。一つは、理性宗教という近代の宗教思想の歴史的展開を検討するなかで、従来、特定の宗教の立場を排した抽象的な宗教論と見なされてきた理性宗教論の「歴史性」を明らかにするという主題である。もう一つは、従来、ユダヤ学やドイツ文学、カントの哲学史的研究においてのみ扱われてきたモーゼス・メンデルスゾーン(1729-1786)の思想を、宗教哲学と宗教学のフィールドに引き込んで論ずるという主題である。この二つの主題を、一方を切り離したら他方が成り立たないという密接な関係において論考したところに、本研究の独創性を見出すことができる。

理性宗教論は近代宗教哲学の祖型となった宗教思想であり、その初期の形態が理神論である。論者は、第一部で、ハーバート・チャーベリー、シャフツベリ、ロックらのイギリス理神論が独断論的傾向をもっていたことを指摘し、それに対する厳しい批判の立場をヒュームの宗教論のなかに見出している。そして、カントが、このヒュームの理神論批判の視点を積極的に受容し、批判的に克服していくことで、独断的な理性宗教を批判的な理性宗教論へと再生させていったと論ずる。近代理性宗教論の展開をたどったここまでの論述は、丁寧に文献にあたって綿密で明確なものであるが、特に深い洞察があると

は言えず、以後の論考の準備に止まる。

本論文の中心をなすのは、メンデルスゾーンの理性宗教論と、それをめぐって引き起こされるユダヤ教、キリスト教、啓蒙思想という諸々の立場の葛藤を論述した第二部と第三部である。

第二部において論者は、メンデルスゾーンの理性宗教論を、彼の著作からだけでなく、ユダヤ教の思想史的背景、キリスト者との論争、哲学的影響関係などのさまざまな角度から描き出している。それによれば、メンデルスゾーンの立場は、ユダヤ教はその核心において理性宗教であるという主張と、ユダヤ教は日常的な行為規則の集合体であるという主張の二面性をもっている。論者は、この二面性を通してメンデルスゾーンがユダヤ教をユダヤ教として維持しつつ、キリスト教社会の政教分離の原則に適合するものに変えてゆこうとした、と解釈する。だが、このメンデルスゾーンの立場はアポリアを含む。即ち、ユダヤ教が理性宗教であるという主張を推し進めた場合には、特殊宗教としてのユダヤ教は不要になってしまう。他方、ユダヤ教が行為規則の集合体であるという主張を推し進めると、ユダヤ教は宗教というより単なる制度や儀礼になってしまう。そこで論者は、この二つの主張を総合する視点を、メンデルスゾーンの言葉の不安定さについての考え方に見出す。

この第二部の内容は、論者の該博な知識が裏付けとなって、とりわけ充実したものとなっている。

そして、第二部で説明されたメンデルスゾーンの宗教思想を、さらに理性宗教と歴史的宗教という一般的な理論的枠組みのなかに置き直し、包括的に論究したのが、第三部である。具体的には、カントとメンデルスゾーンにおける理性宗教理解と歴史的宗教の位置づけの対比を中心に考察がなされ、キリスト教をモデルとしたことによるカントの理性宗教論の特質と、ユダヤ教をモデルとしたことによるメンデルスゾーンの理性宗教論の特質が論じられる。カントは、歴史的宗教の特殊性をキリスト教にとって非本質的なものであると見なし得たのに対して、メンデルスゾーンはユダヤ教に関してそう見なし得なかったことが、それぞれの理性宗教の内実を強く規定した。このユダヤ教の解消することを許されない特殊性は、要するに律法であり、論者の議論は律法の問題に集中する。

メンデルスゾーンはスピノザの『神学政治論』の影響下に、ユダヤ教で啓示されたものは教義ではなく律法であると主張し、この啓示の特殊性のなかに律法を守る道を見出そうとした。論者はこのような思想的努力を認める一方で、メンデルスゾーンの見出した道は、ユダヤ人の律法遵守が個人の選択の問題になることを防ぎ得ないものであると指摘する。この指摘は、補論で論じられたメンデルスゾーンの次世代のユダヤ人たちの宗教的動向によって確認され、きわめて有意義である。

この第三部は、本論文で最もダイナミックな議論が展開される部分である。論者は、ユダヤ教における普遍性と特殊性の関係にさまざまな角度から光を当て、検討を加えることによって、説得力のある議論を展開している。ただし、論者が論じようとした理性宗教の歴史性は、メンデルスゾーンの理性宗教論を俎上に載せるのと同程度の比重をもって、カントの理性宗教論におけるキリスト教的色付けを詳しく論考することによって、証示できるはずである。論者の論考がメンデルスゾーンとユダヤ教の関係に重心を置き、カントとキリスト教の論考が手薄になっているのが惜まれる。

本論文はメンデルスゾーン研究に、理性宗教という観念を切り口とした新しい視座を拓いたものとして高く評価できる。さらに、啓蒙主義の時代のキリスト教社会においてユダヤ教徒が社会的解放を実現しながらどうやってユダヤ教を守ってゆくことができるか、というメンデルスゾーンが自らに課した課題は、キリスト教世界とイスラム世界の対立という今日の宗教的状況のはらむ問題と深く通底しており、その点からも、本研究の現代的意義を語るができる。だが、論者において理性そのものの観念および歴史性の観念が必ずしも十分に掘り下げられておらず、理性宗教の歴史性を明らかにしようとした論者の企てはいまだ途上にあると言わねばならない。ただし、この企ては、論者が最初に目論んだ以上の射程をもつものであり、そのことが本論文を通して明らかにされたと解される。その意味では、この途上性はむしろ生産的なものであり、今後の研究に期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年1月11日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。